邦の幼兒教育思想の幼稚なことが表明せられるのは遺憾なことである。

要するに、幼稚園教育は、國家將來の爲めに、甚だ、大切な事業であるから、或種の社會に限らるゝ事なく、一般に普及せらん事を希望に堪へないのである。

幼稚園の方でも、如何にせば、最よく兒童を發育し、愛護し、學校教育の最よき準備となるべきかを、精しく研究せん事を切望するのである。

保育入門（一）

倉橋惣三

一　幼兒の生活

一

子供の生活を觀察するのに二つの見方がある。『まだ發達して居ない』といふ點からの見方と、『既に之れだけ發達して居る』といふ點からの見方とである。勿論、此の二種の見方は、どちらの見方によつた處で、事實の實際に於ては別に變りのある譯ではない。假令ば今年三歳の子供を、まだ四歳にはなりませんと言つた處で、もう三歳になりましたと言つた處で、事實三歳たることに於て何等違つたことを言つて居るのではないと同樣である。しかし、見方の違いとしては、明かに區別することが出來るのである。而して假りに消極的積極的の見方と名づけて置く。ところで、吾々は日常平生、此の二種の見方の中、いづれによることが多いであらうかと考へて見ると、殆んど常に、消極的見方の方によつて居ると言つてもよい。卽

ち『まだ發達して居ない』といふ方の見方を採るのである。坊やはまだ奥齒が生えない。坊やはまだあんよが出來ない。坊やはまだ何を知らない。といふ風である。之れを積極的の見方によつて、坊やは既に門齒が生えた。既に立つことは出來る。既に之々のことは知つて居ると言ふ人は却つて尠いのである。勿論、子供の生活は發達であつて、發達は將來を期待するものであるから、待ち遠き發達に對して、まだ〳〵といふ感の起るのは情としては無理からぬことである。所謂、匍へば立て、立てば歩めの親心といふのが茲のことであらう。しかし、發達の事實そのものからいへば、大きい到達と共に小さい到達にも價値を認めなければならないのである。わけても、人間の精神の發達に於ては、自然に追ふて進まなければならない順序、各時期といふものに、夫々大切なる特殊の價値の存するものである。將來も貴いが、それ〳〵の現在にも貴重な意味があることを考へなければならない。

子供の生活の觀察が、消極の見方に偏し易いといふことは、吾々の日常平生に多いばかりではない。子供の生活の正しい觀察を以て其の生命とする教育に於ても、屢々同樣のことが起る。少くも古い教育に於ては、常にこの方が主になつて居た。但し、子供の取扱ひを誤りなからしむる爲めに、斯ういふ消極的見解による警戒、注意。言ひ換ゆれば超えてならない限度を與へるといふことは、今日に於ても最も大切なことである。彼の子供に對する過度の要求、不相當に高級な取扱ひ、無理な速成、といふ類の弊害の往々にして生ずるのは、却ち此の消極的見方による觀察が明でないための結果である。そのために、近世の兒童研究は、その正確なる知識によつて、之等の『教育上の不相當』の害を除かうとする處に大いなる必要も、貢献もあるのだと稱されて居る位である。

しかしながら、之れは教育上の顧慮である。誤

りなき爲の注意條件である。決して敎育の出發點ではないのである。苟も子供の敎育が行はれようといふには、その子供が現在どこ迄發達して居るかといふことを以て出發せられなければならない。言葉を換へていへば、子供の發達が此處まで來て居る。そこで其の發達を完成せしむる爲に、それ〳〵の途が與へられ、方法が提供せられなければならない。卽ち敎育が與へられなければならないといふ順序になるのである。少くも、そこに始めて最も自然なる、最も適當なる、從つて最も有効なる敎育が行はるゝのである。而して、之れが爲には、積極的の見方によつて子供を知ることが必要になつて來る。

子供が玆まで發達して居るといふことを知るによつて、始めて次の發達を適當に指導することが出來る。子供に斯かゝる自然の要求が熟して居ると知つた時に、始めて其の要求を正當に滿足せしめ、以て其の發達の完成を期することが出來る。すなはち、敎育者は被敎育者が『既に之れだけ發達して居る』といふことを、正當に、且つ一つでも多く知ることによつて、其の成功を期し得るのである。幼兒敎育者は、幼兒の『まだ發達して居ない』點のみ見て居るのではいけない。況んや、自分の無智によつて、幼兒の發達を實際以下に見くびつて居る樣なことがあつてはならない。昔から幼兒敎育の成功者は、すべて、幼兒の生活に、多くの貴い力を見出し得た人々である。

二

子供が三歲乃至四歲に達すれば、可なりに多くのことが發達して居る。先づ其の感覺に就て見ようならば、總べての感覺が、兎に角く其の機能を具へて居る。目は視ることが出來、耳は聽くことが出來、其の他味にしても嗅にしても、又は物が觸れたとか、痛いとか、溫いとか、冷いとかいふことにしても、外から或る刺激が來れば、それを感ずることは充分に出來る。それもやつと出來る

といふのではなくして、可なりの經驗を重ねて居る。のみならず、其の感覺生活が單に受動的のものではなくして、頗る活潑に、能動的に、絶えず其の感覺を作用させて居たいといふ積極的な態度にまで進んで居る。其の感覺生活の活潑さに於ては、恐らく成人の想像するよりも強く盛なるものであらう。殊に、感覺生活を、それ自身に於て樂み、求むるといふ點に就ては、人間の一生の中、一番強い時期と言つてもよかろう。成人に於ては、感覺は一層復雜な生活の材料として用ゐらるゝ場合が多いのであるが、幼兒に於ては、其の感覺を活かすだけに滿足をもつて居るのである。

なかにも、運動感覺と名づけられて居る處の、身體の運動に伴ふ感覺は、此の時期の幼兒の生活に於て、絶えず充分の滿足を要求して居るのである。此の感覺は委しく言へば、關節や腱や、いろ〳〵の部分によつて感ぜらるゝが、其の最も主なるものは筋肉である。卽ち筋肉に何かの活動が與へらるゝ時に起るもので、幼兒はたゞ受動的に此の感覺を經驗するばかりでなく、之れ亦能動的に、自ら求めて此の感覺を活かそうとする盛なる要求を有して居るのである。その要求の强さは、無爲安居をもとむる成人、殊に老人の生活などの殆んど思ひもよらぬ程であると言つてよい。

此の活潑なる感覺生活は、もう一段進んだ活動を要求して居る。それは他でもない。單なる感受作用から、識別作用に進まうとして居るのである。假令ばたゞ色が見えるといふ丈けでなく、色の種類の識別に進み、更に赤とか黃とかの識別ばかりでなく、赤なら赤、黃なら黃の中の、所謂濃淡の識別に進み、それも粗大な識別から、次第に微細な識別に進まうとして居るのである。もとより色ばかりではなく、すべての感覺に通じて同樣の發達を要求して居る。而して、これは、一段の識別に成功して、それが遂に容易になり、次の一段進んだ困難なる識別に移るといふ具合に、絶えず難

を追ふてゆくのであるから、すなはち幼兒にとつては一つの試みとも實驗ともいふべきである。而して、なれたる活動には興味が失せ、新らしい試みに興味の伴ふのは、何の場合にも同樣であるが、幼兒は、特に著しい欲求を以て、此の新活動をもとめて居るのである。卽ち、幼兒の感覺は存分なる活動と、識別とに於て、更に進んだ發達を遂げるの必要ある程度にまで、丁度到達して居るのである。

三

幼兒の內的生活も、亦可なりに豐富なるものである。勿論、抽象の概念生活に於ては未だ不完全且つ貧弱なるものであるけれども、個々の具體的經驗は、生後三年乃至四年の間に於て、隨分多種多數なることを幼兒の精神內容として蓄積して來て居る。まだ整理せられては居ない。まだ系統がつけられては居ない。從つて幼兒自らが自在に主裁し得る知識とはなつて居ない。しかし、此の三四年間に於て幼兒が收得し得る知識材料は、吾々が同年月間に於て新たに收得し得る分量に比して、比較し難き程大いなるものである。而して其の既有の具體知識は、尙ほ非常なる活潑を以て、續々と收得せられつゝある新らしき具體知識と、或は活潑に聯合し、或は自在に同化し、瞬時も停滯することなき觀念活動が行はれて居る。

而して、その活潑な觀念活動は、强い發表の要求となつて外にあらはれて來る。其の發表は、必ずしも自分の內部生活を他人に告げようとするのではない。たゞ、內に充つるものが外に溢路をもとむるのである。なほ自然の結果としては、其の發表によつて、內部の活動が益々促がされ、高められ、擴げられてゆくのである。

其の發表の道具となり手段となるものは、或は言語であることもある。或は描出であることもある。或は形の排列であることもある。或は形態の構成であることもある。乃至また身振動作である

こともある。いづれにしても、恰かも器内の水が外へ流出をもとめ易いと同じように、幼兒の精神内容は外へ向つて盛に活動をもとめる。而して其の活動や決して無秩序、亂雜でなく、印象としては假りに無系統に入つたものでも、發表としては自ら何等かの組織を立てる。但し、組織的發表を完ふする爲には、たゞ發表の要求のみでは充分にゆかない。他に種々なる、組織力の練習が必要である。すなはち、幼兒は、その強い要求に基く發表に存分の機會便宜が與へられ、且つ、其の發表の組織に就て練習の指導を與へらるゝことを、今方さに期待して居るのである。

次に、もう一つ幼兒の著しい欲求の一つは、遊びなかまの欲しくなつて居ることである。孤獨を嫌ふといふことは、或る意味に於ては、生後殆んど直に存することである。しかし、半歲や一歲の嬰兒に、社交、共同生活の欲求といふ程のものはない。ところが丁度四歲前後になつて來ると、其の性情の發達が、斯ういふ方面にまで進んで來る。勿論まだ、青年期になつて初めて完熟するような複雜な微細な社交性があるのではない。其の性情の主調からいへば、大に個人的、單獨的なるものではあるが、父母、祖父母、すきな食物玩具の他に、自分と同年齡位な仲間を求め、その共同生活を要求するまでに欲求が發達して來て居るといふことは、充分に認めてやらなければならぬ事實である。

共同生活の要求に達して居るといふことは、やがて、對人感情の或る發達があるといふことである。對人感情のあるといふことは、やがて道德生活の初まつて居ることである。道德の概念はまだない。自我の內省に基く高級なる道德的生活はまだない。しかし、具體的な道德的諸感情は、幼兒の柔い心の畑に、其の萠芽を發しかけて居るのである。その種子の由來に就ては、暫く問はぬとして、發芽にまで達して居るといふことは、既に大

なる發達である。發達といへば莖の丈けの伸びたこと、花の咲いたこと、果實のなつたことゝのみ考へて居る人もあるが、それよりも、種子から發芽までの發達の方が、如何に大いなるものであるか測られない。彼のたわいない幼兒の性情はこゝまで發達して居るのである。實にこゝまで發達して來て居るのである。而して、自らの強い發達力と共に、その發達を助けて呉れる適宜なる培養に向つての強い要求をなして居るのである。

五

以上、幼兒の生活の全體に亘る記述でないことは勿論である。簡單なりといはるゝ幼兒の生活も、研究次第で、あながち簡單なものではない。しかし、上述の如き概觀略說によつても充分に分ることは、幼兒の生活が明かに或る程度までの——實はなか〳〵大いなる——發達に達して居て、その發達に基き、又その發達の爲に、多くの貴重なる強い要求を有して居るといふことである。更に、言ひ方を換へて言へば、幼兒の生活は、諸方面の敎育を與へらるべく、待ち設けて居るといふことである。

美及び藝術

（本誌前卷連載『美學講話』の結論）

文學士　菅原敎造

只今迄研究して參りました通り、美術經驗は實に多種多樣な客觀的條件のもとに現はれるものでありません。藝術の各部類は客觀的條件の重大なる相異點を代表して居るのみならず、一つ一つの藝